

「わらべうたのつどい」の実践記録  
—親子読書アドバイザースキルアップ研修の中で—  
A Review of the Practice of the Warabeuta  
- Skill-up Training for Parent-Child Reading Advisor -

岩 田 裕 子  
(非常勤講師)

キーワード：親子読書、わらべうた、遊び、子ども、図書館

## 1. はじめに

筆者は、島根県立図書館主催の「令和4年度親子読書アドバイザースキルアップ研修」を、令和4年10月12日（水）13:30～15:00に出雲市立中央図書館（東部地域一出雲会場）、10月21日（金）13:30～15:00に浜田市立中央図書館（西部地域一浜田会場）の2会場において、「わらべうたのつどい～目を合わせ心を合わせて歌いませよ～」と題して講師を務めた。本稿では、その実践内容について報告し、課題と展望を述べる。

## 2. 研修実施の経緯

本研修の参加対象の「親子読書アドバイザー」について、島根県立図書館のホームページによると、

「どんな絵本を選んだらいいの？」といった読み聞かせに関する不安や悩みなど、家庭での読み聞かせについてアドバイスができる地域の読書ボランティアの皆さんです。

とある。乳幼児をもつ保護者に向けて絵本の話ができる人を育てようと親子読書普及のため、島根県立図書館で平成24年から26年度にかけて養成された人達で、現在、島根県内に66名の登録者を数える（2021年8月12日現在）。

親子読書アドバイザーは、図書館や保育所、公民館等での読み聞かせや講話等の活動を通して、乳幼児親子にかかわる機会が多い。島根県立図書館の研修担当者からは、“親子間のコミュニケーションの一つとして、絵本の読み聞かせだけでなく、わらべうたもおすすめできるといい”、また、“絵本の読み聞かせやお話会の中で、子どもとの遊びややりとりとして取り入れられる

術を習得できるといい”、そして、“学んだことを地域の担い手として伝えていってほしい”といった思いをうけた。

筆者は、島根県立大学松江キャンパス内の児童図書館「おはなしレストランライブラリー」で月に1回、来館者親子を対象に「わらべうたゆりかごの会」（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため2020年3月より休止中）を行なっている。また、乳幼児親子対象の研修やイベントにおいてわらべうたで遊んだり、図書館や保育所、小学校等でのお話会で、子ども達とわらべうたを楽しんでいる。また、子どもだけでなく、大人を対象に、保育士研修等の講師としてわらべうたの実践も行なっている。これらの筆者の実践を踏まえて、島根県立図書館から研修の依頼を受けた次第である。新型コロナウイルス感染症予防対策の観点から、部屋の広さ、参加人数等を考慮し、今回、参加対象を親子読書アドバイザーに限定しての実施となった。

### 3. わらべうたのつどいの実践

#### 1) 実践の目的

わらべうたの特徴、伝承のされ方、背景などの説明はできるだけ簡潔にして、とにかく一緒に繰り返し遊び、わらべうたの魅力が感じられる時間にしたいと考えた。

わらべうたは、目の前で起きていることがそのまま遊びになっている。子どもの生活や遊びの中で繰り返し歌い継がれてきた口承文化である。ゆえに、メロディーや言葉、動きに正解はない。今回、筆者が紹介するわらべうたが参加者自身が知っているものと少し違うということもあり得る。しかし、それを正そうとせず、参加者それぞれが、自身の経験の中で培ってきた「マイわらべうた」を大事に育ててほしい。そして、今回紹介するわらべうたの中に、もし、マイわらべうたにしたいと思うものがあれば、積極的に子ども達と繰り返し遊んでマイわらべうたを育ててほしいことを伝えた。遊ぶ際には、子どもが遊びのペースを教えるため、その様子を見守るようにして遊ぶことをすすめた。

わらべうたは、本来、肌で触れ合って遊ぶものが多いが、コロナ禍での研修であるため、研修担当者とも協議し、参加者同士の接触は控えることになった。しかし、参加者の心が通い合う時間にしたいたいと思い、「目を合わせ、心を合わせて歌いましょ」をモットーに、手合わせなども向かい合っただけのエア一合わせで心合わせに重点を置いた。わらべうた選びについては、筆者が子どもの頃から遊んできたものや子ども達や親子と遊んできたものの中から、コロナ禍でも比較的的日常に取り入れやすそうなものを、そして、わらべうたの様々な特徴がよく表れているものを選んだ。研修の参加対象が、親子読書

アドバイザーということもあり、親子のかかわり方、遊び方の提案として、わらべうたが元になっているわらべうた絵本や実践の手助けとなる本を紹介、展示した。参加者には、子どもの読書にかかわる仕事をしている人や小学校などで読み聞かせやストーリーテリングなどを行っている人もいと予め研修担当者から聞いていたため、子どもの成長も考え、幅広く楽しめるものを選んだ。また、参加者が居住している島根に伝わる魅力あるわらべうたも紹介したいと考えた。

## 2)実践の内容

2日間のわらべうたのメニューは表1のとおりである。

表1

わらべうたメニュー

項目	わらべうた	遊び方
名前を呼ぶ	このここのこ	
数えうたで楽しむ	いもにんじん	数えうた/まりつき
絵本で楽しむ	どんぐりころちゃん	
季節を楽しむ	どんぐりころちゃん	しぐさ遊び/じゃんけん/ まりつき/銭回し
絵かきうたを楽しむ	みみずが三びきおったげな	絵かきうた
布で楽しむ（「わらべうたゆりかごの会」定番のわらべうたより	にぎりぱっちり	足じゃんけん
	大山の山から	たこあげ
	じーじーばー	いないいないばあ
	たたんでたたんで	
重ねうたで楽しむ	てるてるぼうず	まじないうた
	ほほほたるこい	季節
遊ばせうた	はなちゃん	顔遊び
	いちりにり	足遊び
	親指ねむれ	手の指遊び/子守うた
「お話」と一緒に楽しむ	ついだついだ	季節
	ここはてっくび	手遊び
	おさらにおはしに	しぐさ遊び/じゃんけん
	もつれんなもつれんな	しぐさ遊び/門くぐり
体全体を動かして遊ぶ	くまさんくまさん	なわとびうた/しぐさ遊び
	いっぴきちゅう	隊列遊び
	ぎっこんばっこん	舟漕ぎうた
お別れ	さよならあんころもち	手遊び

### 3)実践の様子

#### (1)10月12日(水)出雲会場(東部地域)

参加者20名—親子読書アドバイザー9名、ストーリーテリング講座修了生4名、図書館職員3名、行政担当者2名、研修担当者2名

研修が始まる前から、展示本を手にとって見たり配布資料に目を通したりする参加者の姿に、わらべうたを習得しようという意欲が感じられた。全体的に、筆者の遊びの例の示し方をよく見て聞いて遊んでみるといった形になった。日頃の活動の表れか、参加者は、声がしっかり出て動きも大きく丁寧にゆっくりと実践していた。

最初の「このここのこ」の時から筆者が「あそびましょ」と呼びかけると、自然に「はい」と手を挙げたり「いいよ」と歌うように言葉を返したりする参加者がいて、お互いの心の距離が一気に近くなった。「わらべうたゆりかごの会」に通っていた1歳8か月の女の子のお母さんが、お風呂が苦手な娘に、手ぬぐいで娘の大好きな「にぎりぱっちり」をやってみて、親子でお風呂時間が毎日楽しくなったというエピソードを紹介すると、「いいね」といった風にうなずき合う参加者もいた。足じゃんけんとしての「にぎりぱっちり」も紹介したが、わらべうたの特徴である、動きと言葉とメロディーが一体化していることに納得していた。布遊びについては、研修終了後に、使用したシフォン布がどこで購入できるかを聞かれ、参加者の“やってみたい”という意欲が伝わってきた。重ねうたに取り入れた「てるてるぼうず」と「ほほほたるこい」については、参加者がよく知っているわらべうたで、歌い始めから、お互いの声を聞き合いながら楽しんで歌っていて、美しい響きが心地よかった。

「親指ねむれ」については、子どもへの触れ方による感じ方の違い、配慮について2パターン紹介したが、関心を持って取り組んでいた。子どもは、子守うたと理解していなくても、しっかりそれを感じ取っていて、歌うと眠ってしまう子どももいるというエピソードにも熱心に耳を傾けていた。研修終了後に、「覚えたいので、もう一度やってみてほしい」と参加者に個別に頼まれ、再現した。「おさらにおはしに」のしぐさ遊びでは、筆者が「間違えたら脱落ですよ」と言ったからか、参加者は真剣に遊び、最後の「だんご！」の言葉としぐさに力が入りすぎて、場が笑いに包まれた。

わらべうたメニューに示している「「お話」と一緒に楽しむわらべうた」については、絵本やお話を中心の活動の中にわらべうたを取り入れる場合、わらべうたをお話の中の一部と考えて選んで遊ぶことが必要になるということ、そして、あまり難しかったり盛り上がりすぎるものだと次のお話になっても、子ども達がしぐさをいつまでも楽しんでいたり、お話に戻りづらく

なったりするという話に、参加者は、お話し会の中での手遊びなどで経験があるようで、強くなっていた。

「くまさんくまさん」について、「両手をついて」を参加者同士が向かい合って遊ぶエアータッチバージョンでは、床に手をついて遊ぶ時よりもお互いの呼吸が合い、生き生きしていた。ふるさとの斐川地方の「くまさんくまさん」の紹介については、その土地ならではの言葉を興味深く聞いていた。

「ついだついだ」では、一人で遊んだ後、2人組になってお互いのグーの手を交互に積み上げていった。座席の都合上、一部3人組になってしたが、自分にはハードルが高いと思った参加者があたりを見回し、すぐに席を移動して2人組を作ろうとしたところに大人ならではの遊び方を感じた。一通り遊び方を覚えると、お互いに動きを確認しながら、積極的に繰り返して遊んでいた。

「ここはてっくび」については、「何となく知っていたが、遊び方が分からず、教えてもらってよかった。」という声があった。筆者が、保育所で子ども達と遊ぶ中で、子ども達から生まれたわらべうた「ここはあしくび」「ここはかおだよ」のエピソードに、子ども達と遊びたい気持ちが高まったように見え、うなずきながらメモをとっていた。

何歳にはこの遊びと枠に縛られることなく、わらべうたを提案できたのはよかった。年齢に応じていろんな遊び方、かかわり方ができるのがわらべうたの魅力だと参加者の様子を見て改めて思った。

今後は、研修を受けた参加者がさまざまな形でわらべうたを実践できると思っています。研修の冒頭で、資料のコピーは控えて、本来のわらべうたの姿として、口から口へと一緒に遊んで伝えていってほしいと述べたのだが、終了後に、早速、活動を共にしている組織の会員同士で「これは、会の人達に教えよう」「これはこういう時にできるね」などと話し合いながらおさらい会をしている姿が見られ、すぐにでも今後の活動に活かそうとする姿に感銘を受けた。

## (2)10月21日(金) 浜田会場(西部地域)

参加者 16名—親子読書アドバイザー10名、読書推進の会1名、読み聞かせボランティア1名、図書館職員2名、研修担当者2名

最初は、会場の雰囲気は堅く、入りの「このここのこ」も筆者自身もぎこちなかったが、だんだんお互いの呼吸が合い、楽しさが広がっていった。筆者が、わらべうたを示した先から、積極的に口ずさんだり繰り返して遊んだりする参加者がいて、遊びの空気を作ってくれたように思う。遊ぶ時は、資料を見ずに、「FACE TO FACE を大事に」と話していたが、言葉を理解して

はっきり口ずさみたかったからか、資料をたよりに歌って楽しむ参加者もいた。研修担当者2名は、前回に引き続き2回目の参加とあって、遊ぶ姿に安定感が見え、繰り返しの重要性を感じた。

会場の空気がほぐれた「いもにんじん」では、筆者「いーも」参加者全員「いーも」、と掛け合いで順々に数えていったのだが、数名、その後「いーも」と指を出し



### 浜田会場での研修会の様子

て遊んでいて、新しい遊び方の発見だった。「みみずが三びきおったげな」の時、絵かきうたとしてよく知られている「へのへのもへじ」「へめへめつくし」にもふれたが、参加者はすぐ描いてみてお互いに確認していた。布遊びでは、筆者が遊びを示した先から次々に遊んでいく参加者がいて、それにつられて周りの参加者にも遊びが伝わっていく形になった。しかし、途中で遊び方が分からなくなり、動きを止めて筆者の方を見るため、筆者が、また、遊び方を示すということを繰り返していった。参加者の中に、子どもが遊ぶ姿が重なった。

「ついだついだ」では、1人で遊んだ後、2人組になって遊ぶ時に、筆者が「エアーで遊んでください。」という間もなく、お互いのグーの手を思いきり重ねて遊び始め、慌てて止め、そのことを指摘して消毒をするように伝えた。遊びに夢中になるとはこういうことだと思った。「3人組4人組5人組でも挑戦してみてくださいね。」と話すと、参加者は、「とてもできない」といったように、笑顔で首を横に振っていた。参加者が、一番積極的に楽しんでいたわらべうただった。「ここはてっくび」については、筆者は参加者に見えやすいように手指を示していたのだが、逆に参加者もその通りにやっていて、手の向きが辛そうに見えたので、自分が遊びやすいようにするようにと声をかけた。参加者同士の手を使って遊べると、より分かりやすいと感じた。

今回、研修終了後に展示本をじっくり見ていた参加者が多かった。保育士をしている参加者からは、今回のメロディーとは少し違うが、子ども達と「くまさんくまさん」で遊んでいた話や「今回の講座で、忘れていたわらべうたを思い出しました。子ども達とやります。」という話を聞いた。高齢者にかかわる仕事をしている参加者は、「まず、いもにんじん、やってみます！」と具体的にわらべうたを挙げ、早速、実践に活かす意欲が感じられた。ま

た、「短いのがたくさんありやりやすそうで楽しかった。」など、参加者のストレートな思いや考えを聞くことができた時間だった。別の参加者からは、気になったわらべうたを示して確認され、今から参加者主体で遊ぶ時間が始まりそうな勢いを感じた。

前回の出雲会場では、一つ一つのわらべうたを参加者と一緒に遊びながら繰り返していくようにしたが、今回は、参加者の様子を見て、最初に遊び方を示した上で、参加者それぞれが自分のペースで周りと遊べるようにした。無理強いせず、参加者自身が、遊ぶわらべうたに参加できるかできないかの判断をする時間が設けられたのはよかったが、その分、後半の流れはせわしなくなるところもあった。

#### 4) 参加者の感想

##### (出雲会場)

- ・何でも遊びにして楽しめるわらべうたの魅力を知ることができました。子ども達にたくさん返していきたいです。
- ・久しぶりに遊んだ！という感じでした。今日にでも明日にでも皆に教えてあげたい、一緒に遊びたいものばかりでした。
- ・出雲支部で（ブックネットいずも）で他の会員に伝達しようと思います。
- ・わらべ歌研修とても参考になり、すぐに活用できて、そして何より心が開放される感覚をしっかりと味わいました。大人の心がこれだけ楽しく浮き立つのだから子どもたちはどんなに楽しいだろう！と思いました。
- ・何回もくり返して、どんどん楽しくなったので、子どもたちと、ぜひやりたいと思った。

##### (浜田会場)

- ・とても楽しかったです。早く思いきりわらべうたで遊べる時が来るといいなと思いました。
- ・子ども達の心の中、また高齢者の方と一緒にわらべうたのよさをみつけていきたいと思いました。
- ・すっかり忘れていた記憶がよみがえった瞬間を感じることができた時間でした。
- ・忘れてしまうので、何回かに一度くり返し同じ様なわらべうた研修会をしてもらえるとう自分の物として習得していけるのかと思いました。

参加者と筆者の心が輪になってつながった気がした。研修を意欲的に楽しんだ参加者の、これからの活動が見えるような感想の数々に、地域の子どもの幸せを願う思いが伝わってきた。

その後、しまね子ども読書等推進の会出雲支部では、令和4年11月6日

(日)に、研修に参加した会員数名が講師となって、「わらべうたを覚えよう！」と題して伝達研修を実施し、楽しい時間を過ごしたと聞いた。また、小学校でストーリーテリングをしている参加者からは直接、「今日は6年生に『火の鳥と王女ワシリーサ』の後、『いもにんじん』をやってみました。とても生き生きと楽しんでくれました。」「4年生でもしましたが、なんか子どもたちは凄く楽しかったみたいで、『できるようになったよ』とか声をかけてもらいました。子どもたちとの距離は縮まったようです。」と報告があった。参加者が、それぞれの立場で地域の推進役となって子ども達のために活動していることに頭が下がった。わらべうたは、人と人とをつなぐ魅力ある伝承遊びだと改めて思った。

## 5) 今後の課題

「やっぱり対面はいいですね。」と研修終了後、担当者からの一言があった。人の温度、呼吸を感じられるのは対面ならではの。感染症対策のため、スクール形式での実施となったが、遊んだわらべうたによっては、肌は触れ合わなくても、自席から立ちあがって、参加者同士が向かい合い、歌いながら拍をとりながら近づいたり離れたりすることで、お互いの心が触れ合うのが参加者の息遣いから感じられた。筆者も、参加者と目が合い、声や動き、表情でやりとりができたと感じた。参加人数も丁度良かったため、より様子が把握しやすかった。コロナ禍で、オンライン研修が多くなってきた中で「子どもの本のことについては対面で！」という島根県立図書館の熱い思いが参加者と筆者に伝わり、「FACE TO FACE」の持つ力を再認識させてくれた時間になった。

わらべうたはすぐ覚えられるが、遊ばないとすぐ忘れてしまう。研修で出会った参加者と繰り返し遊んでみて、わらべうたを吸収したい思いが響いてきただけに、研修で紹介したわらべうたが、参加者のマイわらべうたになる過程を見ることができたらどんなによいかと思う。全体的に、心を開いて遊ぶことができたとは思ったが、コロナ禍でのわらべうた選びや紹介の仕方は難しかった。触れ合わずに遊ぶことは、本来のわらべうたの性質上、矛盾ともいえる。しかし、できるだけ伝承された形をそのまま研修で参加者に渡し、参加者の今後の活動につなげてほしい。悩ましさはあったが、わらべうたメニューの表に示したように、わらべうたを項目立てることで分かりやすくなったのではないかと思う。もう少し内容を絞って、繰り返し遊び、その後で参加者主体の遊びに展開していった深める形にしてもよかったのではないかとも思った。しかし、参加者に、一つでも多く、今後の活動に取り入れられそうなわらべうたの選択肢を提案することができたのはよかったと参加者からの感想からも感じた。加えて、筆者の子ども達とのわらべうたエピソード



ードの紹介も、熱心に書きとめている参加者が多かった。エピソードから、わらべうたで遊ぶ子どもの姿を感じることで、参加者の今後の活動にわらべうたを取り入れる手助けとなればと思う。

「わらべうたのつどい」を振り返り、今後の展望として、研修の展開方法についての考えを述べる。

#### ①ふるさとの伝承にスポットを当てる

参加者が居住している島根に伝わるわらべうたについては、今回、「みみずが三びきおったげな」と「大山の山から」、「くまさんくまさん」（紹介のみ）で遊んだ。「くまさんくまさん」については、宮城に伝わるわらべうたで遊び、斐川地方に伝わるわらべうたは参考までに紹介した。ふるさとのわらべうたには参加者の関心が高いと感じた。ただ単に、遊んで楽しいというだけでなく、郷土の伝統文化を子ども達に伝承する上でも意義のあることではないかと考える。

#### ②よく知られているわらべうたにスポットを当てる

全国各地に類歌が多くあるようなわらべうたを中心に、わらべうたメニューを組み立てていくと、限られた時間の中での研修では、参加者が最初からもっと親しみやすく、主体的に遊ぶことができ、今後に活かしやすいのではないかと考える。実際、「てるてるぼうず」と「ほほほたるこい」の重ねうたで特に、それを強く感じた。

#### ③お話として楽しむわらべうた絵本にスポットを当てる

わらべうたの伝承のされ方の一つとして、絵本についてもふれた。その中で絵本「どんぐりころちゃん」を取り上げた。参加者は、絵本の特性をいかしたわらべうたの描かれ方に、大変興味深く聞いていた。読み聞かせの活動に直結しているためか、展示していた絵本もじっくり読んでいた。参加者と本来の遊びとしてのわらべうたを楽しんだ上で、お話として楽しむわらべうた絵本に話を広げていくと、わらべうたと絵本双方の魅力が感じられ、親子読書アドバイザーとしての今後の活動がさらに深まるものになるのではないかと考える。

## 4. おわりに

遊びが多様化してきて、子どもがわらべうたを知らない、わらべうたで遊ぶことが少なくなっていると感じる。親世代に話を聞いても、「こういう遊びをしたことがない。」「どうやって遊んだらよいか分からない。」といった声が聞かれる。しかし、子どもと遊んでみると、わらべうたは子どもの中にあるものだ実感する。しかも、身近な大人が遊んでくれることは、子どもにとって、声の温もり、肌の温もりを感じられる安心感にほかならない。わ

らべうたは、遊ぶためのうた、声かけのうたである。自分が今ここにいることを実感でき、認めてもらえる、生きていく上で、かけがえのない栄養だとも思える。今までも参加者は、子どもに心をこめてわらべうたで遊んできたかもしれないが、これからも、子どもの中にわらべうたのよさを、わらべうたの中に子どもの姿を感じながら、繰り返し遊んでいってほしい。そのことは、わらべうたが伝承されていくというだけでなく、子どもが生きていく上での人間関係の土台作りの支えとなるはずである。

最後に、執筆に際し、話を聞かせていただいたり資料や情報を提供していただいた島根県立図書館の子ども読書支援係長の坪内珠美様に心より感謝申し上げます。

### 【主要参考文献】

- ・尾原昭夫（2009）『日本のわらべうた 歳事・季節歌編』、『同 室内遊戯歌編』、『同 戸外遊戯歌編』、文元社
- ・（1979-1992）『日本わらべ歌全集』全 27 巻、柳原書店
- ・畑玲子・知念直美・大倉美代子（1994、1995）『幼稚園・保育園のわらべうたあそび 春・夏』、『同 秋・冬』、明治図書
- ・木村はるみ・蔵田友子（2009）『うたおうあそぼうわらべうた—乳児・幼児・学童との関わり方』、雲母書房
- ・コダーイ芸術教育研究所（2008）『わらべうた わたしたちの音楽—保育園・幼稚園の実践—』、明治図書
- ・たかぎとしこ（2012）『わらべうたでいきいき保育一年中うたって遊ぼう「いろはにこんぺいとう」』、『わらべうたですくすく子育てみんないっしょにうたって遊ぼう「うめぼしすっぱいな」』、明治図書
- ・近藤信子著柳生弦一郎画（2001）『にほんのわらべうた①～④』、福音館書店
- ・みなみじゅんこ（2013）『どんぐりころちゃん』、アリス館
- ・佐藤志美子（1996）『心育てのわらべうた』、ひとなる書房
- ・島根県立図書館『こどもに関わる方へ 親子読書アドバイザーの派遣』  
<https://www.library.pref.shimane.lg.jp/kids/hogosha/koshi-advisor.html>  
最終アクセス 2022 年 3 月 5 日